

# 火の国にて

かぶらやこうし  
鏑谷晴矢

「こ、これは……」

目の前に広がった光景の異様さに伊織は言葉を失った。

そこには何も無かった。

左右を切り立った崖に囲まれ、海に面した扇形おっぺの土地は、一面、赤黒い岩に覆われ、そこに人が住んでいた痕跡など、探しても見あたらない。

頭の中に、これから火端村ひはしに行くといった時に峠の茶店の親爺おやじつぶやいた言葉が蘇る。

「お行きになるんで……おやめになった方が良いかと」

「なぜだ」

「今の火端は、人の行くところじゃありません」

「話には聞いている。だが、俺も、この年になるまで色々なところを視てきた。もっと酷い場所も知っている」

「まあ、是非にとおっしゃるなら、止めはしませんが……」

その時は、大げさな奴だと気にもとめなかった伊織であったが、今、村を見下ろす丘の上に立つと、親爺の顔色が何を語っていたか、突き刺すように分かるのだった。

「物見遊山でいく場所じゃないですよ」

檜垣伊織ひがきいおりが、火端村の惨状さんじょうを聞かされたのは三日前だった。

藩の東端にある火端村が、近くの三代山みしろやまの噴火で被害を受けたのだという。

「行ってはくれぬか……」

歳の離れた兄の、いつに変わらぬ端正な面差しの中に、深い苦悩の色を見て取った伊織は、間をおかず、

「行きましょう。わたしごときが行って、何の足しになるかはわかりませんが、出来る限りのことはいたします」

と答えたのだった。

兄上は余計なことは何も言われなかった。だがそれはつまり、村に行つて永ながの長崎滞在で得た知識を生かせと云うことなのだ。

そして、これは、家業を継がぬ弟に、何の小言もなく長崎に遊学ともいふべき自由な学問を許してくれている自分にできる初めての恩返しだ。そう考えた伊織が旅装を整え、火端村へむけ出立しゅったつしたのは、その日の昼過ぎだった。

硫黄いおうと木の焦げた匂いをかきながら丘を下るうち、伊織は農民ふうの男とすれ違った。

その男に尋ねると、山腹の林を切り開いた場所に漁民たちは避難しているのだという。

村におりる道を右手にそれ、しばらく歩くと林が切れて人の声が聞こえてきた。

伊織はそのまま村に入った。

人々は武家姿の伊織を見ると集まり始め、遠巻きに取り囲み始めた。

「役人はいるか」

だれが村長かわからないので、皆を見回しながら伊織は尋ねた。

「あなたさまは？」

「檜垣伊織、村の力になろうと思つてやつてきた……何でも屋だ」

「何でも屋だあ。さむれえ一人に何ができるよ。まずは米を持つてこい」  
人の輪の端から怒鳴る声がある。

「役人には頼まないのか」

「役人の姿なんか、御山おやまが火を噴く前から見たことがないわ。沢向やまがしこの山河岸村の屋敷で震えとるんじやろ」

ところどころ焦げた着物を着た、大きな男が答える。

「よし、食べ物なんかは俺が掛け合つてやる。まずは、村の様子、皆の  
ことを教えてくれ」

伊織のざつくばらんな物言い、そして役人に掛け合ってやる、という言葉が功を奏したのか、すぐに村人たちは口々に村の窮状を訴えだした。驚いたことに、村人は総勢百四十三人で、死人は一人も出ていなかった。

「作兵が鎌を振り回して、みんなを追い回してここに押し込んだんじや。最後に、わしを担いで山を登った時に御山が火を噴いた」

老人が先ほどの大男を指さしている。

「村長んこのゴクツブシだとみんな思っとったが、違ったの」

「そうじゃ、遊んでばかりだと思っておったら、こんなところに御山様からの逃げ場所を作ってくれてるとはのう」

「家は無いがの」

「ぜいたく言うな。命があるだけでも儲けものじや」

「それで村長はどこにいる」

「五平どんは死んだよ」

「なに！」

「違う違う、大往生じや。その通夜の最中に、御山が火を噴いたんじや」

「みんなが通夜に集まっとったから、一人も死ななんですんだんじや」

「おぬしはなぜ噴火を知ったのだ」

伊織は作兵に尋ねた。

「昔からの伝えにあったんじや。山の祠のゆわ（硫黄）の匂いが強くなり、地鳴りが続けば、ひと月ほどで火を噴くとな」

「よくやったな。さて、これからのことだ。まず、ここに雨露をしのぐ家を建てよう」

「材料がねえよ」

「いや、一本の立っている木に、他の木を立てかけて屋根の尖った家にするのだ。少々異国風になるが、しばらくなら暮らせるはずだ。あとは水だが……来る途中に目にしたが、この少し上に水場があるな」

「交代で水を汲みに行ってます」

「そうか、そこから水を引こう。船大工はいるか。よし、こっちに来てくれ」

言いながら、伊織は懐から旅の途中に書き記した図面を取り出し、集まった男たちに見せ、指示を与えた。

「できるか」

「へい、こんなわかりやすい図面があるなら、なんとかできます」

「よし、それは任せたぞ。さて、これから役人の所に行くが、誰か道案内を頼めるか」

「俺が行く」

そういって、頬かむりをした小柄な男が歩み出た。

「いや、みと、お前はだめだ。俺がいく」

男は、あわてる作兵を押しとどめ、

「兄<sup>あに</sup>さんは力が強いから家を作るのに必要だろ。俺でいい。さあ、行くか」

先になつて歩き始める。

伊織は、あわててその後を追う。

「おさむれえさん」

背後から声をかけられて伊織は振り返った。

日に焼けて、なめし革のような顔色をした老人が、すがるように見つめている。

「どうかあ。米をなんとかしてくだせえ。しばらく喰うもんさえあれば、また、村を作りなおすことができますんで。今日から、いや今すぐにも……そしたら、またもと通りの村にしてみせますんで」

伊織は、その言葉の強さに圧倒された。

「また山が火を噴くかもしれんぞ」

「だったらまたやるですよ。何度でも何度でも……」

「よし、待っている。必ず米を持ってきてやる」

\*

「あんた何者だ？武家のようだが、それだけじゃ、あの家とか水場の話  
はできないはずだ」

しばらく無言のまま、前後して細い道を歩いていると、不意にみとが  
振り向かずに尋ねてきた。

「何でも屋さ。家業も継がず、興味の向くまま長崎で色々と学んできた。  
今度、やっと、その道楽が役に立つ。俺も尋ねていいか」

「なんだ」

「なぜ男の格好をしている。お前、女だろう」

「俺は男だ」

「だが、その肩、首、腰、どうみても——」

「うるさいな。しつこいと案内をやめるぞ」

「……顔色が」

「黙れ」

「いや、それじゃない。皆の顔色が良くないのが気になるって話だ」

「そりゃあ、あんな目にあつたんだ。無理もないさ」

「だが、この辺りの岩の色が……赤い」

「なんだ？」

「いや……お前、言葉になまりがないな」

「俺は、お城下にいたからな。親爺が死んで、帰ってきたらこの始末さ。  
それだけさ。俺の事は、もう詮索すんなよ。さあ、ついたぜ」

みとの指し示す方を見ると、同じ火山の麓にあるとは信じられないほ  
ど、のどかな風景の里が、青空の下に広がっていた。

「いない？」

伊織は大きな声をだした。

「へえ、お代官の矢神さま始め、お役人さまは、すべて詰所つめしょの方に行っ  
ておられます」

山河岸村の庄屋は、伊織の剣幕にたじろぎながらもそう答えた。

「詰所？」

「ああ、それなら分かる。俺が案内するよ」

庄屋の家の上がり框がまちに腰を下ろしていたみとが、身軽に立ち上がると、色に向けてあごをしゃくった。

「おい、どこに向かうんだ」

山河岸村を出て、再び火端村ひはしに向けて歩き始めるみとに伊織は声をかけた。

「俺がお城下にいく少し前、五年ほどだな、御山おやまのふもと六カ村をまとめる場所として山の中腹に詰所つめしょが作られたんだ。不便な場所だし、こんな時期だから、誰もいないと思っていたんだが……」

「どこにあるんだ」

「さっきの山河岸村と火端村の真ん中あたりの山腹だ。これから少し登りになるぞ。大丈夫か」

「俺は大丈夫だ。だが、お前も大した健脚ぶりだな。よほど鍛えていると見える」

「詮索はするなといったぜ」

山を登るにつれ、伊織の表情は陰しくなってきた。

それに気づいたみとが声をかける。

「どうした」

「詰所についたら、すぐにお前は帰れ」

「どうした？」

「嫌な気配がする……」

「俺は感じないが。変な奴だな。それとも気が小さいのか？さあ、あれが詰め所だ」

「あれが……」

みとの肩越し、火山特有の岩肌を剥き出した山腹に、奇妙な砦が見えていた。

巨大な山門を、ぐるりと背の高い木の扉が取り囲んでいる。

「さあ行こうか」

だが、伊織は詰め所を睨んだまま動こうとはしない。  
やがて、

「お前はここで待っている、ちよつと調べることもある」

そういって、伊織は道を外れ、遠巻きに詰め所のまわりを調べ始めた。

しばらくして、みとの近くに戻った伊織は、

「お前はすぐに村に帰って、皆に水を飲まないように伝える」という。

「なんだ、どういうことだ」

「いいから早く行け」

「わ、わかったよ。そんなに睨むなよ」

伊織の語気の強さに気圧されて、みとは頷いた。

みとが、弾むように身軽に麓へ駆け下るのを見送ると、伊織は詰所から距離をとりながら、ゆっくりと上手かみてにまわった。

上から詰所を覗いてつぶやく。

——やはりそうか——

日が暮れるのを待って、伊織は詰所に忍び込んだ。

高い扉に囲まれているとはいえ、もともと人ではなく落石を防ぐための柵であるためか、意外に簡単に入ることができた。

詰所内には篝火かがりびがたかれ、農民らしい男たちが忙しげに動き回っている。

見上げると、そびえ立つ門の足元に作られた廊下に立ち、時折、男たちに指図する二人の武家の姿が見えた。



廊下につけられた灯りの炎が風にゆらぐのに伴って、巨大な二人の影が作業する男たちの上でゆらめく。

伊織は、頻繁に声を張り上げる方が代官の矢神だろうと見当をつける。隣の男は頭巾で顔を隠しているため、誰なのか見当もつかない。

伊織は、物陰に隠れながら、門にとりつくくと耳を澄ませた。

「これでやつと期日に間に合わせることができな。矢神」

「危なかったですなあ。まさか、この時期に、三代山が噴火するとは」

「少し流してしまっただが、あれぐらいなら取り戻せる」

「本当にほっとしました」

「やはりあの赤い石は、辰砂しんしゃか」

男たちを見上げて伊織は声を掛けた。

「誰だ！」

足元からわき起こった声に、二人は驚いて伊織を見おろした。

「貴様は誰だ」

伊織は、門の柱から身を離すと、刀の束に手をかけて、ゆっくりと答える。

「俺は檜垣伊織ひがきいおり、何でも屋だ」

「どこから入った」

それには答えず、

「水銀みずかねだな」

「……」

「山腹に転がっている石は赤い辰砂しんしゃだ。お前たちは、上様に黙って辰砂から水銀を作り、暴利を得ているのだろう。あれは高く売れるからな。

まあ、それはいい。藩のものを勝手に売るのはマズイが、俺には関係がない。だが、山の上から大量に水銀を流すのを見逃すわけにはいかぬ。

この下には溶岩を逃れて逃げてきている漁民たちがいる。お前たちは、火の水に追われ、命からがら逃げた村人に毒を喰らわせる気か」

「水銀——よく気がついたな、何でも屋。だが『漁民がいる?』それがどうした。漁民どもなど霞かすみのような命だ。どうにでもなる。わしらにあればどうにでもできる。だいたい、お前ひとりで何ができる」

「俺は何でも屋。『何でもできる何でも屋』がウリでな。何ともならないものでも、何とかするのさ」

「一人ですか?つまらん。どうにもならんな。夢は寝ている時に見ろ」

矢神の目配せで十数人の捕り手が伊織をとりかこんだ。先ほどの農民ではなく矢神の配下の者だろう。全員が真剣を抜く。

伊織も、砦の中央に下がりながら、腰の大刀の鯉口を切った。

ゆっくりと刃を抜き放つと峰を返す。

無言の気合いと共に男が斬り込んできた。軽く身をそらした伊織は、手首の力だけで、男の肩に峰をたたきつける。軽く振り下ろしたように見えた一撃の効果は劇的だった。嫌な音がして鎖骨を折られた男は、雷に打たれたように吹っ飛ぶ。

振り向きざま伊織は横薙ぎに刀を振り払った。仲間の様子に衝撃を受けて身がすくんでいる男は、それをかわせず地面に沈んだ。

以後、同様に一人ひとり片付け、十人目を倒した時、伊織の体に異変が生じた。

少しずつ呼吸が苦しくなっていたのが、一度に激しい咳となつて出てきたのだ。

「これは……毒か」

その様子を矢神が鼻で笑う。

「このあたりは山の頂いたたきあたりから毒がでておつてな。普段は、足元の扉を開けて抜けるようにしているが、こういった時には、その戸を閉める手はずになっておる。それは時とともに、お前のいる一番低いところ

に溜まるのじゃ。気づいておらんかったようだが、わしの手の者は、お前に挑んでは段の上に登り、お前が弱るのを待っておったのだ」

「おのれ！」

ふらつく伊織に、男たちが飛びかかってくる。

何度かそれをかわしたものの、いよいよ、立っていることさえ難しくなったその時、

「頭はよくても、やっぱり御山に関しては素人だな」

声とともに、小さい影が空から降ってきた。

頭に被った頭巾の影が物の怪のように怪しく揺れる。

影が小鬼の踊るように軽やかに動くと、残った男たちは、たちまち毒の漂う床に崩れ落ちた。

「みと、か。今の動き……思いました。お前……佐伯道場の小天狗……」  
「そんな変な名前で呼ぶなよ。俺は佐伯みと。話は後ろで聞いたていたぜ。さあ、つかまれ」

二人は階段を上り、代官たちの前に立った。

「佐伯の小天狗、名前は聞いていたが……道場屋風情が、お上にたてついでただですむと思っっているのか」

矢神がうなるように言う。

みとが笑った。

「すむかどうかは知らない。だが、お前は許せん」

「蠅どもが。わしだけならともかく、このお方にまで刃向かうなら命はないぞ」

「——力に頼るな」

伊織が呟くようにいった。

「なに？」

「力に頼れば、もっと大きな力につぶされる」

「ばかな」

「ばか？お前こそ、そのばかげた頭巾をとれ、城代山口頼母」

「なぜわしの名を——」

伊織は、顔を城代に近づけ、いった。

「さっき名乗った名前とは別の名前が俺にもある」

「まさか、お前は、いや、あなたは——」

「もう一度いつてやる。自分の体の中にない力に頼るな。お前のちやちな権力など、村の老人が持つ気持ちの強さに遠く及ばない——霞のようなものだ」

伊織のつぶやきに顔色を失った城代は、がっくりと膝をつく。

矢神も、目を張り裂けんばかりに見開いたままだ。

「行こうか、みと」

城代の胸を、とん、とついて転がすと伊織はいった。

「村のみんなが待っている。安心しろ。ここで水金が作られることは二度とない」

村への戻り道、輝く朝陽が山肌を照らし始めた。

先に歩く伊織を、みとが追う。

「なあ、あの時、なんていったんだよ。お前何者なんだ」

「俺はなんでも屋さ」

「そんなわけないだろう。あつ」

岩に足をとられたみとを伊織は支えた。

その拍子にみとの顔を覆った頭巾が外れる。

艶やかな髪が朝風になびき、若い娘の体が伊織の腕で優しく弾む。

じっと見つめる大きな瞳に、魅入られたように伊織はみとの顔を見つめ続けた。

△了△